



TITLE:

道家の經濟思想

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. 道家の經濟思想. 經濟論叢 1941, 52(1): 84-96

ISSUE DATE:

1941-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131491>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第一號

昭和十六年一月

論 叢

國家科學としての經濟學……………經濟學博士 谷口吉彦

林子平とその經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎

調査における統計の役割……………經濟學博士 蜷川虎三

我國經濟發達の特質に就て……………經濟學士 堀江保藏

公庫制の生成機縁……………經濟學士 徳永清行

道家の經濟思想……………經濟學士 穂積文雄

研 究

シュピイトホフの景氣理論の批判……………經濟學士 青山秀夫

下請制工業の國民經濟的意義……………經濟學士 田杉競

英國經濟學に於ける東洋社會の理論……………經濟學士 島恭彦

說 苑

貿易統計の新しい任務……………經濟學士 有田正三

アツシニア紙幣……………經濟學士 河野健二

附 錄

彙報・外國雜誌論題

道家の經濟思想

穂積文雄

道家の經濟思想をしばらく道家の中心を形成するとせられる、その始祖老子並にその展開者たる莊子、楊朱に於いてうかがふてみる。

老子の思想は孔子の思想に對するアンチテーゼとして成り立ち、孔子が道を説いて仁義を重んずるに對して、老子は『大道廢有仁義』²⁾と言ひ、道を自然に歸し、須らく人爲を去りて自然に遵へと教へ、虚無を唱へて無欲を説くこととなり、『無欲以觀其妙』³⁾『見素。抱朴。少私。寡欲』⁴⁾『聖人欲不欲。不貴難得之貨』⁵⁾と曰ひ、又曰ふ、

五色令人目盲。五音令人耳聾。五味令人口爽。馳騁敗獵令人心發狂。難得之貨令人行妨。是以聖人爲腹不爲目。故去彼取此。⁶⁾
不貴難得之貨。使民不爲盜。不見可欲。使民心不亂。是以聖人之治。虛其心實其腹。常使民無知無欲。

然しながら、老子の無欲を説くときその欲を經濟學上の意義に於ける欲望として解する限りは、その無欲と言ふは單なる修辭でなければ一の誇張に外ならぬとせねばならぬ。蓋し、若し經濟學上の意義に於ける欲望を無にするれば死あるのみであり、從て無欲論は即自殺論でなければならぬこと、例へば食欲が減退するとき醫者にかからねばならぬことを考へれば直ぐに解るところで、老子といへども自殺論を説くものでない以上人の生存を維持するに足るだけの欲望充足はこれを認めざるを得ぬ筈であるからである。これ上掲の如く『腹の爲にし』¹⁾と言ひ、

1) 老子、道徳經、十八章。
2) 老子、道徳經、十九章。
3) 老子、道徳經、十二章。
4) 同上、
5) 同上、

6) 同上、一章。
同上、六十四章。
同上、三章。

『其腹を實たす』と言はざるを得ぬ所以で、かくて欲望を斥けながら欲望を認めなければならぬとき、無欲論は一轉して知足論とならねばならぬこととなる。即曰く、『知足者富。』『知足不辱。知止不殆。』『禍莫大於不知足。咎莫大於欲得。故知足之足常足矣。』⁷⁾

そしてここに『常に足る』爲に『足るを知れ』と言ふことは『足る』ことの必要を肯定するもので、ここに『足る』とは欲望の充足を意味し、かつ、それに要する財貨の存在を豫想するとともに、それが最小限の欲望の充足を暗示し、従て無欲論の欲は經濟學上の欲望の意よりは所謂望蜀の欲に解すべきの妥當なるを知り、そして老子の無欲論をかく解する限りそれが節欲論の範疇に屬すべきこと孔孟の寡欲説、荀子の道欲説と殆ど選ぶところなきに至るを認めざるを得ぬ。もつともここに『足るを知る者は富む』は富むことを理想とするものではないかとも考へられるが、この場合その富むとは物的に巨萬の富を累ねるの謂ではなくて、心的に物欲に煩はざるることなき状態を指せるものなることは多言を須ぬずして明なるところであらう。

かくて老子は虚無を説き無欲を唱へながらも、物質生活を否定する能はず、最小限度に於ける欲望の充足はこれを肯定し、従てそれに要する財貨の必要を認めるが、然らば財貨獲得に就いては老子は如何に考ふるであらうか、換言すれば老子の生産論は如何にあるであらうか。思ふに老子の欲望充足の肯定は最小限度に於てである以上、その爲の財貨の生産も亦最小限度に止るとせられるは理の當然でなければならぬ。かくて老子は技術が發達して、種々の財貨が作出せられることを不可とする。吾々はそれを例へば次の諸句に於てうかがふを得るであらう。曰く、

天下多忌諱而民彌貧。民多利器國家滋昏。人多伎巧奇物滋起。法令滋彰盜賊多有。故聖人云。我無爲而民自化。我好靜而民自正。

7) 同上、三十四章。
8) 同上、四十四章。
9) 同上、四十六章。

我無事而民自富。我無欲而民自朴。¹⁰⁾

絕聖棄智。民利百倍。絕仁棄義。民復孝慈。絕巧棄利。盜賊無有。¹¹⁾

そして、かく生産を最小限度に止める一方、この無欲論者は生産せられたる財貨に就いては、これに拘泥する物欲を排撃して繰り返へし『生じて有せ』ざるべきを言ふこと次に引く如くである。曰く、

萬物作焉而不辭。生而不有。爲而不恃。功成而弗居。夫唯弗居。是以不去。生之畜之。生而不有。爲而不恃。長而不宰。是謂玄德。¹²⁾ 道生之。德畜之。長之。育之。亭之。毒之。養之。覆之。生而不有。爲而不恃。長而不宰。是謂玄德。¹³⁾ 大道汎兮其可左右。

萬物恃之而生而不辭。功成而不名有。¹⁴⁾ 愛養萬物而不爲主。可名爲大。是以聖人終不爲大。故能成其大。¹⁵⁾

そして、ここに『生じて有せず』『生じて辭せず』『長じて宰らず』又は、『萬物を愛養して主たらず』等種々の語によりて表現せられてゐるところのものは要するに生産はするが、その生産物に對する所有權を主張せぬと言ふことを意味するものに外ならぬと思はれる。そしてそれは物の所有權は當然にはその生産者に歸屬すると云ふことを暗黙の中に認るとともに、それにもかかはらずその所有權に拘泥してこれを主張することなからむことを力説するものと解される。そうすれば、當時生産組織は未だ簡單にして、生産者は即生産的勞働の發揮者以外ではないと考へられるが故に、生産物の所有權は當然には生産者に歸屬すると言ふことは、財貨の所有權の根據をこれが獲得の爲に拂はれたる勞働に求めむとするものであり、從てそれは、吾人は自然に財産の權を有する、そしてその權が何處より來りたるかを尋ねれば吾人が各自土地或は物質に吾が勞力を加へたることに起因する、故に人がその勞力を或る物に加ふるやすでにその物に對して所有權を有し他人のこれを犯すべからざる位置に立つ、と爲せるジョン・ロックの所論に暗合し、またアントン・メンガーの主張する全勞働收益權の思想に相通すると考へられる。そしてその所有權を主張するなからむことを説くことは結局所有權を否定し、私有財産制度を否認する

10) 同上、五十七章。
11) 同上、二章。
12) 同上、五十四章。
13) 同上、五十四章。
14) 同上、五十四章。
15) 同上、五十四章。

11) 同上、十九章。
12) 同上、十章。
13) 同上、三十四章。
14) 同上、三十四章。
15) 同上、三十四章。

に傾き、從てそれは社會主義乃至共產主義思想に通ずるとも言へるかと思ふ。後に述べる老子の小國寡民の社會が村落共同體と解される所以もあるひはここに存するかと思はれる。然かし、老子の小國寡民の社會は自給自足經濟の典型として述べられてゐると解すれば、それは社會主義乃至共產主義の一形態たる村落共同體と言ふよりも一の經濟單位と言はねばならぬとも考へられる。然しまた社會主義殊に共產主義は社會を化して一の經濟單位と爲すものであると言ふならばもはや言ふことはない。然しながら老子の思想には無政府主義の色彩が濃厚であり、そして無政府主義と共產主義はその本質に於て氷炭相容れざる對蹠的なものであることを思ふときは老子のこの思想を以て共產主義を説くものと言ふよりもむしろ單に所有權私有財産制の主張を喜ばぬものと言ふにとどまるの無難なるをとるべきであらうか。

かく老子は生産に就いて甚だ消極的な考を抱くが故に、從て分業の如きも亦別にその必要を認めるとは考へられぬのであるが、それでも人類が生産に於て必然に入り込む分業は彼といへどもこれを如何ともすることができないことは、彼が財貨の流通を説いて次の如く述べてゐることによつてこれを知ることができよう。曰く、

天之道。其猶張弓與。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。天之道。損有餘而補不足。人之道。則不然。損不足以奉有餘。孰能有餘以奉天下。唯有道者。是以聖人爲而不恃。成功而不處。其不欲見賢。

蓋し、財貨の流通は分業の結果であるとともに分業は財貨の流通を前提とするからである。

然しながら老子が分業を否定するものでないと言ふことは直にそれを唱導すると言ふことを意味することにはならぬ。否、吾々は老子の小國寡民の思想に於て彼が自給自足經濟を理想とするにあらざるやを思はしめられざるを得ぬ。そして自給經濟は分業と對蹠的でなければならぬ。その小國寡民の思想とは即次の如くである。曰く、

小國寡民。使有什伯之器而不用。使民重死而不遠徙。雖有舟輿無所乘之。雖有甲兵無所陳之。使人復結繩而用之。甘其食。美其服。安其居。樂其俗。鄰國相望。雞犬之聲相聞。民至老死。不相往來。¹⁸⁾

生産せられたる財貨は老子が流通經濟を承認するや自給經濟を理想とするやに論なく、また彼が分配に於て共產主義思想に通ずると否にかかはらずやがて消費せられることになるが、『欲せざるを欲し』、『人伎巧多くして奇物滋起る』を憂へて『巧を絶ち利を棄』てよと説き、『生じて有せず』と教へる老子は、生産物の消費に於ては儉を説き奢を戒める。そしてそれは素より論理の當然で何等怪しむを要せぬところと言ふべきであらう。即或は『聖人去甚。去奢。去泰。』¹⁹⁾と言ひ、又曰く、

我有三寶。持而寶之。一曰慈。二曰儉。三曰不敢爲天下先。慈故能勇。儉故能廣。不敢爲天下先。故能成器長。云々。²⁰⁾

朝甚除。田甚蕪。倉甚虛。服文綵。帶利劍。厭飲食。財貨有餘。是謂盜夸。非道也哉。²¹⁾

既に述べたるが如く、老子の理想とする社會は小國寡民の世であり、それは經濟上より見れば自給自足であるが、自給自足は即他人に依存せぬことであるから政治上より言へば自主獨立であり、從てそこには老子の理想とする無爲にして化するの治が布かれ、所謂無政府主義の社會が成り立つことになる。そして人々の自主獨立を認め、無爲の治が説かれる場合、財政支出はその要なきことこそ望ましく、財政支出の要なきところに財政收入の要なく、財政收入の要なければ租税の存在理由はない。かくて老子に於ける財政論としては租税を難詰するの說到會ふ位に終ることとなる。曰く、『聖人執左契。而不責於人。有德司契。無德司徹。』²²⁾『聖人不積。既以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。』²³⁾又曰く、

民之饑。以其上食稅之多。是以饑。民之難治。以其上之有爲。是以難治。民之輕死。以其求生之厚。是以輕死。夫唯無以生爲者。是賢於貴生。²⁴⁾

18) 同上、第八章。
20) 同上、第七章。
22) 同上、第七章。
24) 同上、第七章。

19) 同上、二十九章。
21) 同上、五十三章。
23) 同上、八十一章。

そしてこの『聖人積まず、ことごとく人の爲にして己いよいよ有り、ことごとく人に與へて己いよいよ多し』と言ふ句は論語に見ゆる『百姓足。君孰與不足。百姓不足。君孰與足』（論語、顔淵第十二）乃至、フイジラクラツトの『貧農則貧國。貧國則貧王』 *Pauvres paysans pauvre royaume ! Pauvre royaume pauvre roi !* を想起せしむるに足るが、私はまたこの句を讀む毎に遠くナザレの聖者の言行に想到せざるを得ぬものである。新約聖書を繙けば諒して曰く、

イエス出でて大なる群集を見、これを憫みて、その病める者を醫し給へり。夕になりたれば、弟子たち御許に來りて言ふ『ここは寂しき處はや時も晩し、群集を去らしめ、村々に往きて、己が爲に食物を買はせ給へ』イエス言ひ給ふ『かれら往く及ばず、汝ら之に食物を與へよ』弟子たち言ふ『われらが此處にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』イエス言ひ給ふ『それを我にもち來たれ』斯くて群集に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たちと與へ給へば、弟子たち之を群集に與ふ。凡ての人、食ひて飽く、裂きたる餘を集めしに十二の筐に滿ちたり。食ひし者は、女と子供とを除きて凡そ五千人なりき。²⁵⁾

これを一場の荒唐無稽のこととして斥くるは別とし、またこれをミラクルとしてそのまま信仰するもしばらく措く、いまこれを合理的に解せむとして、群集はキリストの教化に浴し、且又キリストがその食料をことごとく出して彼等に與へたるに感激し、彼等の中食料を有せるものは皆それを出して筐に入れたるによるとすれば、これはまさに『ことごとく人に與へて己いよいよ多し』の一解釋、一實例とすることができのではあるまいか。

二

老子の自然を説き無爲を説くや、それを政治の要諦として説くものの如くであり、そして政治は一の人爲であり、有爲である。然らば老子の自然、無爲は人爲の内に於ける自然、有爲の内に於ける無爲、或は同じことであ

25) 新約聖書マタイ傳、第十四章、自十四節至二十一節、同じことは、同じく新約聖書マルコ傳、第八章、自一節至九節、ルカ傳、第九章、自十二節至十七節にも見ゆ。

るが、自然を内容とする人爲、無爲を内容とする有爲と言ふことになるのではあるまいか。されば、莊子がその焦點を漸く政治の要諦より個人の處世に轉じ、かくて社會に向つてゐた思索が個人に向ひ、個人の外に作用する代りに個人の内に沈潜することとなるのは、或は逃避と言はれ、高踏と呼ばれ、または超然主義と名けられるとしても、それは無爲を有爲より、自然を人爲より解放して、以て無爲、自然を純化するものであつて、自然、無爲の思想をしてそのままに進むべき當然の發展の過程を踏ましめるものと解すべきではあるまいか。いまかく解するならば莊子はまことに老子の無爲、自然の思想を繼承してさらにこれを發展せしむるものであり、從て莊子に於てもまた欲望が否定せらるるは怪しむを要せぬ。即莊子は欲望を絶つべきを唱へて或は『虚無恬淡乃合天徳。』『無欲而天下足。』²⁷⁾『其耆欲深者其天機淺。』²⁸⁾『不利貨財。不近貴富。』²⁹⁾と言ひ、又曰く、

夫失性有五。一曰五色亂目使目不明。二曰五聲亂耳使耳不聰。三曰五臭薰鼻困懷中顛。四曰五味濁口使口厲爽。五曰趨舍滑心使性飛揚。此五者皆生之害也。³⁰⁾

夫天下之所尊者富貴壽善也。所樂者身安厚味美服好色音聲也。所下者貧賤天惡也。所苦者身不得安逸口不得厚味形不得美服目不得好色耳不得音聲。若不得者則大憂以懼。其爲形也亦愚哉。夫富者苦身疾作。多積財而不得盡用。其爲形也亦外矣。夫貴者夜以繼日。思慮善否。其爲形也亦疏矣。人之生也。與憂俱生。壽者僭倖久憂不死。何之苦也。其爲形也亦遠矣。³¹⁾

そして莊子の欲望否定論に於てはなまじつか欲望を充足すれば、欲望を充足するを得ざるに至る場合不滿苦痛の増大せむことを恐れるが故に、むしろ始より欲望を絶つに如かずとするにあらざるやを思はしむるところに一の獨得なる論理が見出されるように思はれるがどんなものであらうか。

莊子は欲望を絶つに如かず、それが天徳に合致する所以だと説き、從て欲望充足の具たる貨財を利せずと言ふ。だから莊子にありては財の生産の如きは重んずるに足らぬと言ふよりもむしろ煩はしき營と言ふことになら

26) 莊子、同上、
27) 同上、
28) 同上、
29) 同上、
30) 同上、
31) 同上、

27) 同上、
28) 同上、
29) 同上、
30) 同上、
31) 同上、

ねばならぬであらう。それで莊子は曰ふ。

絶聖棄知。大盜乃止。擲玉毀珠。小盜不起。焚符破璽。而民朴鄙。捨斗折衡。而民不爭。殫殘天下之理法。而民始可與論議。擲亂六律。鑠絕竽瑟。塞曠之耳。而天下始人含其聰矣。滅文章。散五采。膠離朱之目。而天下始人含其明矣。毀絕鈎繩。而棄規矩。擯工匠之指。而天下始人有其巧矣。³²⁾

然し、生産を重ねず、これを煩はしい營としても、財貨なくして生なく、従て生産の否定は生の否定であり、そして生の否定は一の有爲であり、人爲でなければならぬ以上、莊子にして無爲を説く限り、自然を説く限り、従てまた生を否定せぬ限り、生産を否定するを得ず、これを肯定せねばならぬこととなる。そして莊子達生篇に見ゆる『有生必先無離形。³³⁾』『養形必先之物。³⁴⁾』の句はそれを裡書するものと解するを得るであらう。

但し莊子によれば生産はただ自然に従ひ、あへて自然に逆はざるにあらねばならぬとせられること次の諸句によりてうかがひうるところの如くである。曰く、

常因自然而不益生也。³⁵⁾ 天爵也者天食也。既受食於天。又惡用人。³⁶⁾ 至陰肅肅。至陽赫赫。肅肅出乎天。赫赫發乎地。兩者交通成和。而物生焉。無問其名。無闕其情。物故自生。³⁷⁾

そして既に生産は自然に従ふべしとする以上資本の如きは無益有害と言ふことになるのも是非なき次第である。即ち莊子に次の言ある所以である。曰く、

夫弓弩畢戈機變之知多。則鳥亂於上矣。鈎餌網罟罾筴之知多。則魚亂於水矣。削格羅落置罟之知多。則獸亂於澤矣。³⁸⁾

吾聞之吾師。有機械者。必有機事。必有機心。機心存於胸中。則純白不備。純白不備。則神生不定。神生不定者。道之所不載也。吾非不知。羞而不爲也。⁴⁰⁾

それで財貨は簡素を尊びて巧技を重ねず、従て工匠を卑んで、

32) 同上、
34) 同上、
36) 同上、
38) 同上、

卷第四、
卷第七、
卷第四、
肱篋第十、
達生第十九、
在宥第十一。

33) 同上、
35) 同上、
37) 同上、
39) 同上、

達生第十九、
德充符第五、
田子方第二十、
肱篋第十。

純樸不殘。孰爲機樞。白玉不毀。孰爲珪璋。……夫殘樸以爲器。工匠之罪也。⁴¹⁾

と曰ふ。然し自然に倚存すること最も大きく、そして人の生存に最も重要な農業に就いては、例へば次句に見る如く、ただ自然に従ふべしと言はぬばかりでなく、さらに、より自然的な粗放農業を排してより人爲的な集約農業を推してゐるのは注意すべきところであらう。曰く、

昔予爲禾。耕而鹵莽之。則其實亦鹵莽而報予。芸而滅裂之。其實亦滅裂而報予。予來年變齊。深其耕而熟糲之。其禾繁以滋。予終年厭飡。⁴²⁾

かく莊子は財貨を尊ばず、生産を重んぜぬが故に分業はこれを願はぬものの如く吾々は彼より次の言を聽くこととなる。曰く、

農夫無草萊之事則不比。商賈無市井之事則不比。庶人有旦暮之業則勸。百工有器械之巧則壯。錢財不積則食者憂。權勢不尤則夸者悲。勢物之徒樂變。遭時有所用。不能無爲也。此皆順比於歲不物於易者也。⁴³⁾

既に分業を願はず、故に交易の要を認めず、從て商は斥けられる。曰く、『聖人……不貨惡用商』⁴⁴⁾

然し、いくら分業を願はず、交易の要を認めず、從て商を斥けると言つても、現に人間が分業生産關係に入り込んで居る以上交易によらずしてその生産物の分配は如何にして可能であらうかが問題とならねばならぬわけであらうが、然し莊子も亦一の共產的思想を抱き生産物はその必要とする人に歸屬すべく、それを獲得する爲に必ずしも對價を提供してそこに交易なる現象の成立を必要とせぬことを理想とせること例へば莊子に見出される次の諸章句によりてこれを推論することが出来る如くである。曰く、『不抱一世之利以爲己私分。』⁴⁵⁾又曰く、

四海之內共利之。之謂悅。共給之之爲安。……財用有餘而不知其所自來。飲食取足而不知其所從。此謂德人之容。⁴⁶⁾

南越有邑焉。名爲建德之國。其民愚而朴。少私而寡欲。知作而不知藏。與而不求其報。不知義之所適。不知禮之所將。云々。⁴⁷⁾

40) 同上、卷第五、
42) 同上、卷第五、
44) 同上、卷第五、
46) 同上、卷第五、

41) 同上、卷第五、
43) 同上、卷第五、
45) 同上、卷第五、
47) 同上、卷第五、

そしていまこれらの章句を讀みて所有權の根據を必要性の上に置き、財貨は眞にそれを必要とする人に歸屬する、とするを知るとき、私は例へばゴドウキンの『政治上の正義』に見出される所有權の命題を想起してその奇しき相似に胸うたれざるを得ぬものがある。

かくて生産物がこれが必要とする者の手に歸するときそこに消費が成り立つ筈であるが、然らば莊子は消費に就いて如何なる見解を抱くか。思ふに莊子の消費論は吾々が以上彼の思想に就いてうかがつた處よりしてこれを推測すること必ずしも難くないと考へられるが、いま改めてここにこれをうかがへば、吾々は特に莊子が消費を否定する能はぬまでも、餘りこれを重要視せず、むしろ人は消費如きに煩はさるることなく、これが拘束より脱却すべきを理想とすること、これを例へば次の句より汲みとることができるとはあるまいか。曰く、

鷦鷯集於深林。不遇一枝。偃鼠飲河。不遇滿腹。⁴⁸⁾

大知觀於遠近。故小而不寡。大而不多。知量無窮。……察乎盈虛。故得而不喜。失而不憂。知分之無常也。⁴⁹⁾

それから最後に財政論であるが、莊子は老子の思想を繼承して無爲、自然を説き、さらにこれを個人に徹せしむるのであるから、やはり財政支出は望ましきところでなく、従て財政收入の要は認められ難いこととなる理であり、租税の根據を見出すに苦しむことになるわけであるが、特に彼に在りては、所謂所有權の通念を超越して財貨は眞にそれを必要とする者に歸屬すべしとするのであるから、租税の形式に於て賦課徴収するが如きは全く不必要となるとも解される。然らばその様な社會は一體どんなものであらうかと言ふことが問題となるかとも思ふが、いましばらく莊子を讀みてそれらしきものを探ぐれば既に掲げたる諸例のうちのあるもの外さらに例へば次の如きものをあげ得るでもあらうか。曰く、

48) 同上、卷第一、逍遙第一。
49) 同上、卷第六、秋水第十七。

然しながら、欲望を縦にし、快樂を追求するとは言つても、それはそれが自然に従ふ所以だからなのであるから、そのためには欲望を追求しても自然を超えてはならぬわけである。だから楊朱は曰ふ。

楊朱曰。生民之不得休息。爲四事故。一爲壽。二爲名。三爲位。四爲貨。有此四者。畏鬼。畏人。畏刑。此謂之適人也。可殺可活。制命在外。不逆命。何羨壽。不矜貴。何羨名。不要勢。何羨位。不貪富。何羨貨。此之謂順民也。⁵³⁾

楊朱曰。豐屋美服厚味姦色。有此四者。何求於外。有此而求外者。無厭之性。無厭之性。陰陽之蠹也。⁵⁴⁾

そしてこれによりてこれをみれば、財貨の如きもこれにこだはるは自然に背く次第で、また楊朱の所謂順民のことに非ずとして斥けられる所以であるが、楊朱は更に進みて富は却て身を累はす所以でその不可なること貧と異なるところなしとする。曰く、

楊朱曰。原憲婁於魯。子貢殖於衛。原憲之婁損生。子貢之殖累身。然則婁亦不可。殖亦不可。其可焉在。曰可在樂生。可在逸身。

故善樂生者不婁。善逸身者不殖。⁵⁵⁾

然し、そうは言ふもののその欲望を追ひ、快樂を求むるに當りてはまた他人のことを念頭におかず、世間に顧慮せず、ただひたすらに本能に従てその命するままに行動すべしと説いて、徹底せる個人主義、放任主義に到達し、有名なる次の句を残す。曰く、

楊朱曰。……古之人。損一毫利天下。不與也。悉天下奉一身。不取也。人人不損一毫。人人不利天下。天下治矣。⁵⁶⁾

吾々は楊朱が寡欲論、道欲論、無欲論、と名は異なれども等く節欲論欲望制限論の専らとせられる支那上代の思想界に在りて、獨り敢然として縦欲論を高唱して、欲望制限論を否定するを聞くとき、まさに空谷に響音を聞くの思なきを得ぬものがある。然しながら、彼の縦欲を説くや全く個人主義に陥り、衆と共に樂しむことを知らざるものの如くであるが、人が各自の快樂にのみ走りてまた他を顧みぬときは、そこに爭奪生じて世は亂れ、快

53) 同上。
54) 同上。
55) 同上。
56) 同上。

樂の追求は妨げられ、却て所期の目的に反するの結果に到達する恐なしとなし得るであらうか。また彼は縱欲論を説きながら、富を斥け、欲望充足の具たる財貨に對する欲求を人爲として排し、その故でもあらうか、生産に就いて考慮するところの言を見出し難いのであるが、それは或はまた財貨の生産は勞働にまち、勞働は苦痛を伴ひ、苦痛は人の欲せざるところなるが故に、それを行ふには人爲を要し、從て自然に背くこととなるとすれば、その生産を論ぜざるところに無爲自然の哲學の論理の一貫をみることができると言へるかも知れぬが、然しながら縱欲を説きながら欲望充足の具たる財貨を徒らに人爲的欲望の對象として排し、これが生産を無視するが如きは凡そ論理の正當なる展開としては許されぬところではないであらうか。そしてそれがそう許されぬ限り、彼の縱欲論、快樂至上主義並にまたその爲我主義は究局するところ、一場の空論放談以外の何物でもないと斷ぜられてもあるひは一言辯解の辭なかるべきではあるまいか。

本稿に於て私は老子、莊子及び楊朱の思想をそれぞれ現行の書物たる老子道德經、莊子及び列子第七卷楊朱篇に就いてうかがつたのであるが、いまそれらの書物がいつ、だれの手になつたかは議論の存するところであつて、それらの書物に見はれたる思想を以て直にそれぞれ老子、莊子、及び楊朱のそれと斷ずるわけには行かぬこと周知の如くである。それで本稿に於て老子、莊子及び楊朱の思想とせるものは、嚴密には上掲のそれぞれの書物に見はれたる思想と言ふべきである。然しながらそのことは、それらの書物が道家思想の中心を形成するものであることには別にかかはりもないところであり、從てそれに於て道家の經濟思想を把握することがそのために何ら妨げられるに至らぬことは多言を要せぬところであらう。